様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２１６６

研究課題名（和文）文化財としてみた地歌箏曲の研究―伝承の危機にある楽曲のアーカイブ化を目的として

研究課題名（英文）The purpose of this study is to archive musical pieces of Jiuta Sokyoku

研究代表者
萩岡　松韻（Hagioka, Shouin）

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：３０３７６９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：地歌箏曲の楽曲アーカイブを目的とした研究。稀曲等次代への伝承が危ぶまれている楽曲について、音源の収集、楽曲の伝承者に指導を受けることで、楽曲の音源化・楽譜化を試みた。地歌箏曲では口頭伝承が昭和の初めまで行われていた。現在は作品の多くが楽譜化されているが、楽譜化できない口頭伝承の部分を知る実演家の多くは没し、口頭伝承を受けた実演家の存在は貴重である。本研究はそうした実演家より直接指導を受け、楽曲をアーカイブすることを目的とした。地歌箏曲の喫緊の課題といえる現存する古典曲の調査、楽曲の楽譜化、録音等による伝承者の演奏の保存、稀曲等の公開演奏を行うことで無形文化財ともいうべき楽曲の保護保存を進めた。

研究成果の概要（英文）：We tried to create sound sources/musical scores for musical pieces which tradition to the next generation is endangered such as Kikyoku by collecting sound sources and receiving guidance form the successors of musical pieces. For Jiuta Sokyoku, oral tradition had been performed until early Showa. At present, musical scores have been created for many works however many performers who were familiar with oral tradition for which musical scores cannot be created died therefore the existence of performers who received oral tradition is important. This study is purpose to archive musical pieces by receiving guidance directly from such performers. We have proceeded protection and preservation for music pieces which can be an intangible cultural property by researching existing Kotenkyoku that is an urgent issue in Jiuta Sokyoku, creating musical scores for musical pieces, preserving musical performances by successors such as recording, and having public musical performances such as Kokyoku.

研究分野：山田流箏曲演奏家

キーワード：地歌　箏曲　山田流　生田流　稀曲　口頭伝承

１．研究開始当初の背景

いわゆる「地歌箏曲」は、本来平家琵琶を伝承してきた当道座の構成員が併修する専業として公認されていた音曲であった。

「三味線」が誕生し、当時の流行り歌の断片を組合せて弾き歌う「組歌」が石村検校（？～1642）らによって成立。その後、弟子(孫弟子とも）の柳川検校（？～1680）が、本来の「手」を打ち破る新たな手法を加えた「破手組」を作曲して石村以来の組歌に組み入れて整備し、当道座内での伝承の為に組織化した。これが「地歌」の嚆矢であり、当道座では、三味線の職格を得るための必修曲とした。この伝承は現在に至るまで京都に「柳川流」として続き、組歌の一部が伝承されている。

その後、柳川の孫弟子で大坂の野川検校（？～1717）がさらに編集の手を加え、全 32 曲に組織立てた。これを伝承する芸脈を野川流といい、今に至るまで、全曲伝承されている。

とはいえ、明治 4＝1871 年の盲官廃止令によって当道座が解体して以降は、柳川流も野川流も、三味線組歌の伝承は停滞し、全曲演奏出来る演奏家は極く僅かしかいない状態である。

三味線組歌が規範曲となっている故か、柳川検校以降の新作は殆ど無い。一方で、柳川の弟子の浅利・佐山・市川・淺妻の各検校と、淺妻の弟子の野川検校や浅利の孫弟子の深草検校達は、挙って「流行り歌を幾つか適宜組み合わせた、意味の一貫しない歌詞」に拠る「組歌」から脱却して、一曲で一定の意味のある歌詞を持つ「長歌物」を誕生させ、その後も次々と作曲された。これらも、組歌に次ぐ規範曲と定めたものの、作品数が多くなり過ぎたため、大坂の津山検校は伝承すべき推奨曲を制定した。これを「津山制定長歌 50 番」という。この 50 番以外の長歌も含め、長歌物の伝承は風前の灯火の作品が多い。

また、人気の芝居歌を座敷用に摂取した「芝居歌物」や、社交の場で一般に愛好された「自由に情念を歌い上げる短めで洒落た端歌物」が、恰も現今の歌謡曲のように次々生まれては消えて行く中、現在も人気曲として演じられる曲もあるにも拘わらず、辛うじて伝承されている稀曲も多い。

箏曲についても、職格を得るための「箏組歌」や「段物・砧物」の他、珍しい地域の特性を持った「替手」が失われつつある。

以上の様な状況を憂い、可能な限り、昔の名人の残した音源や、隠れた伝承者を発掘し、その楽譜や音源を蒐集してアーカイブ化する必要が迫っていると感じ、使命感を持って今回の研究に取り組んだ。

２．研究の目的

本研究は地歌箏曲の楽曲アーカイブを目的とした研究であり、主に首都圏で活動している山田流および生田流 諸派、特に九州系、および名古屋での国風会で稀曲等次代への伝承が危ぶまれている楽曲について、音源の収集、楽曲の伝承者に指導を受けることで、楽曲の音源化・楽譜化をすることを目的とした。地歌箏曲では口頭伝承が昭和の初めまで行われていた。現在は作品の多くが楽譜化されているが、楽譜化できない口頭伝承の部分を知る実演家の多くは没し、口頭伝承を受けた 80 歳を越える高齢の実演家の存在は貴重である。

本研究はそうした実演家より直接指導を受け、楽曲をアーカイブすることを研究の中心に据えた。喫緊の課題といえる「現存する古曲の調査」、「楽曲目録の作成」、「伝承者の演奏の保存」を行うことで無形文化財ともいうべき楽曲の保護と保存を行い、これをもって貴重な古曲の伝承の一助となるのではないかと考えた。

当初本研究で明らかにしたいと考えた内容は、以下の５点である。

（１）地歌箏曲の現行伝承曲の目録作成。

（２）楽曲の伝承者による演奏の記録。廃盤となっている貴重レコード・音源・楽譜の収集。

（３）地歌箏曲についての各芸系における比較を通して音楽的な特徴を明らかとする。

（４）生田流箏曲の芸系に伝わる同名曲の比較を行い、歌の節付・箏・三絃の手付の違いを明らかにする。また歌詞についても異同を明らかとする。

（５）地歌箏曲の古曲の楽譜化と録音等による楽曲のアーカイブ。

これまで箏曲の楽譜は、その芸系の家元が学習者の学習および暗記の手助けのために出版してきた。また、楽曲を録音した音源等も学習者の模範演奏となるよう、芸系の家元をはじめとして多くの実演家がおこなっている。従って「直接習うことで細部の演奏表現が理解できる」という性格を持つ。

また、出版されている楽曲の多くには稀曲・秘曲といわれている曲はほとんど含まれ

ておらず、同時に、そうした曲を伝承している実演家の高齢化のために伝承そのものが危ぶまれている。

本研究では、実演家が主体となって研究者と研究連携を行うことで、地歌箏曲の稀曲・秘曲の正確な保存ができるのではないか、そしてこれにより、昭和初期からの SP レコード、ライブ録音、ラジオ放送音源に残される芸系の１世代もしくは２世代前の実演家の演奏と現行の演奏の違いを知ることができる手がかりとなる基盤ができるのではないかという点を本研究の学術的な特色・独創的な点と考えた。本研究によって、伝承が失われる可能性がある稀曲・秘曲の収集・整理・保存がなされることは、今後の地歌箏曲の古典演奏研究において学術および演奏の上でも意義あることであり、無形文化財である楽曲の保護保存となると考える。

３．研究の方法

本研究の内容は、（１）秘曲・稀曲の収集（２）楽曲の記録（３）楽曲分析（４）稀曲・秘曲として伝わる古典作品の弦名譜および五線譜での楽譜化を行い、伝承が途絶えている曲についての復元を行い、地歌箏曲の古典作品の集大成を行うことの４つに分けられる。本研究は、伝承者へのフィールドワークによる調査（インタビュー・聞き取り調査・レッスン）、関連資料・文献の収集、楽曲分析、楽譜化、保存音源の製作で展開される。研究成果を発表するために東京、京都、大阪等でのレクチャーコンサートの開催で展開された。

４．研究成果

（１）地歌箏曲の現行伝承曲の目録作成について

地歌箏曲には、地歌の野川流と柳川流が伝える楽曲、生田流および山田流を代表する箏曲の各流派が伝える楽曲など、多様かつ多数のレパートリーがある。そのなかには、上記「研究開始当初の背景」に述べたように、演奏機会や伝承者の少ない稀曲も含まれている。文化財としての地歌箏曲の重要性を確認し、その魅力を次世代に伝えていくために、江戸時代以来の地歌箏曲の楽曲に何があるのか、それらのうち現在に継承されている楽曲はどれなのか、その目録作成は急務と言える。

地歌箏曲の楽曲目録を掲載する従来の研究の重要なものには以下がある。①平野健次・久保田敏子（編）「寛延以降地歌唄本総合索引」（昭和 48。小泉文夫・星旭・山口修監修『日本音楽とその周辺』音楽之友社、569～808 頁）、②中井猛「現存する地歌・箏曲の曲目総覧」（平成３。宮城会『支部だより』18 号）、③平野健次『三味線と箏の組歌－箏曲地歌研究Ⅰ－』（昭和 62。白水社）、④岸辺成雄監修、平野健次編集『山田流箏曲史』（昭和 48。山田流箏曲協会）。このうち①は、京都で出版された『糸の節』類の歌本（寛延４年『琴線和歌の糸』を初本として、宝暦７年『新曲糸の節』などの増補出版を繰り返す）、大坂で出版された『糸のしらべ』類の歌本（寛延４年『糸の調』を初本として、宝暦９年版などの増補出版を繰り返す）、『歌曲時習考』類、江戸時代の楽曲目録である『歌系図』（天明２）など、29 点の江戸時代の地歌箏曲の文献を対象に、収録曲と作詞・作曲者、曲目分類などの情報をまとめた労作であり、地歌箏曲（三味線組歌と箏組歌を除く）の作曲年代を推測する基礎資料となっている。①は現行伝承曲と廃絶曲を区別しない目録であるのに対し、②は地歌箏曲家・中井猛の研究に基づく現行伝承曲の目録であり、芸系の枠を越えて地道かつ緻密に行われた貴重な成果である。③は古生田流の箏組歌と野川流の三味線組歌の目録を掲載する。④は山田流箏曲の現行伝承曲の目録を掲載する。

これらはいずれも地歌箏曲の現行伝承曲を知る上で欠かすことのできない情報を提供しているが、たとえば①の場合、地歌箏曲の文献として重要な宝暦 12 年の『泉曲集』や明和４年の『琴曲新大成糸のしらべ』、文化２年の『歌曲時習考』などの情報は扱われていない。②③の場合には芸系の全てを網羅する情報は掲載されていない。④は山田流における現行伝承曲の情報は掲載されていない。

上記の状況に踏まえ、本研究では、調査する歌本・譜本の対象を従来の研究より広げて、廃絶曲と現行曲を含む地歌箏曲の目録を作成し、その目録に基づく現行曲の調査に着手した。着手にあたっては、野川美穂子『地歌における曲種の生成』（第一書房、平成 18）も参照した。また、山田流箏曲の現行伝承曲については、萩岡松韻「山田流箏曲の古曲についての研究」（基盤研究(C)平成 24～26 年度）の成果も参照した。地歌箏曲の芸系は多く、各芸系に特徴があり、芸系ごとに閉鎖的

に伝承を保持している側面があり、情報を得にくい。そのため、現時点では、現行伝承曲を網羅する目録の完成にはいたっていない。しかし、今後も研究を続けることにより、情報を追加して、目録の完成を目指したい。

（２）楽曲の伝承者による演奏の記録。廃盤となっている貴重レコード・音源・楽譜の収集。

この研究では、伝承が危ぶまれている芸系の稀曲（他の芸系で同名同曲が伝承されている場合も演奏表現の違いがあることから稀曲としたものを含む）について、若手演奏家を派遣し、伝授を受けさせることを行なった。既に述べたことの繰り返しとなるが、地歌箏曲は口頭伝承を基本としており、楽譜に記された内容は「覚え書」「メモ」のような性格のものであり、直接の指導を受けることを前提としている。このことから、地歌箏曲の芸系のうち九州系地歌のＨ伝承者に若手演奏家を派遣し同人が伝承する地歌「峰崎勾当作曲《袖の露》」・「菊岡検校作曲《竹生島》」・「湖出金四郎作曲《鳥辺山》」の三曲について、楽譜、稽古音源、模範演奏音源を収集しデジタルアーカイブ化した。

また、九州系地歌箏曲の別の芸系Ｉ師へのインタビュー（入門の頃から修業時代）、同師より提供・入手した楽譜と模範演奏音源をデジタルアーカイブ化した。同様に、名古屋系地歌箏曲の伝承者Ｍ師にもインタビュー（入門の頃から修業時代）、同師より提供・入手した楽譜と演奏音源をデジタルアーカイブ化した。さらに京都上派萩原正吟直系の弟子であるＮ師に京都系の地歌「湖出金四郎作曲《鳥辺山》」「峰崎勾当作曲《雪》」「松浦検校作曲《菊》」「作物《たぬき》」および箏組歌《四季の曲》《四季の友》《友千鳥》について長谷川が直接伝承を受け楽譜、稽古音源、模範演奏音源を収集しデジタルアーカイブ化した。これらは今後各芸系の演奏表現の違いについての分析を行う際の貴重な資料となる。

SP レコードのアーカイブとしては、大正から昭和にかけて発売されていた「オリエントレコード」に残る各芸系（（３）で後述）の複数の演奏家の録音をデジタル音源化した。中でも京都上派の渡辺正之と萩原正吟の演奏による箏曲《八段の調》は柳川三味線（後述）と古態の箏による合奏であり貴重な演奏である。

この他、研究代表者が伝承する山田流箏曲に移調された地歌箏曲および山田流箏曲の古曲の楽譜の整譜を行なった。

（３）地歌箏曲についての各芸系における比較を通して挙げられる音楽的な特徴

地歌箏曲を伝承する芸系を細かく挙げると、

１．菊永検校太一を芸祖とする「古生田流」の①大坂北派の菊筋 ②菊仲検校系菊筋③中島絃教系 ④宮城系。

２．市浦検校卯の一を芸祖とする「大阪新生田流」の ⑤中筋 ⑥楯筋 ⑦正派系。

３．安村検校頼一を芸祖とする「京都系生田流」の ⑧京都上派 ⑨京都下派 ⑩伏見派。

４．宮原検校孝道一を芸祖とする「九州系生田流」の ⑪本田勾当系 ⑫長谷幸輝系川瀬派 ⑬長谷幸輝系福田派 ⑭笹尾竹之一系　⑮林検校正安一門下の斉藤芳之一系　⑯大塚菊寿一系。

５．松野検校正豊一を芸祖とする ⑰「中国系生田流」

６．久村検校定一を芸祖とする ⑱「名古屋系生田流」

７．継山検校阿一を芸祖とする「継山流」の ⑲「大坂南派富筋 ⑳菊池派菊筋菊田系 ㉑菊池派菊筋菊井系 ㉒菊池派菊筋菊武系。

といった 22、或いはさらに枝分かれした芸系も含めると、それ以上の伝承系統が有り、それぞれが微妙に異なっている。

先ず挙げられるのは地域による違いである。一つは、伝承する曲目のレパートリーにかなりの差がある点で、例えば同じ長谷幸輝門下であるにも拘わらず、⑫の川瀬派と⑬の福田派では伝承曲に差がある。また、両派の頭首である川瀬里子も福田栄香も尺八家に嫁しているにも拘わらず、三曲合奏に於いては、川瀬派では胡弓入りを好むのに対して福田派では尺八入りを好む傾向が強い。

また、地歌には歌が付き物であるので、当然、地域の微妙なイントネーションに節付けが左右されるのは自明のことである。例えば、ポピュラーな《黒髪》でさえ節付けは各芸系によってかなり異なっている。さらには、同じ大阪でも、古生田流の箏組歌を伝承する①大坂北派の菊筋と、継山流箏組歌を伝承する⑲大坂南派富筋とでは、三弦に関しては同じ野川流三味線組歌を伝承しているはずが、後者の「富筋」の方が古い伝承形態を今に伝えていて、例えば表組の《浮世組》と奥組《七つ子》では、『松の葉』（1703 年刊）の「秘曲

相伝之次第」が伝える「《浮世組》を弾いた後で、引き続いて《七つ子》を弾く」という約束が現行されていて、《浮世組》の結句〽若衆踊りを･･･」を省いて《七つ子》を歌っているし、他の組歌に関しても細部の歌詞は微妙に異なっている。

歌詞そのものについても各芸系で違いが多い。一つには、本来は盲目の奏者による口承伝承であったが故に、細かな「てにをは」の違いは言うに及ばず、恰も伝言ゲームの様に、或いは空耳のような聞き違いが固定している例が結構ある。例えば《今小町》の〔手事〕の後の〽高き位の花…」を〽高き雲井の花…」と歌ったりしている。また、聞き違いではないが、〽粋な男の手管には」を下品だからと、〽雅びおのこの手管には」とか〽身のいたずらになるとても」などと歌わせている芸派もある。もっとも、山田流では、明治の改良唱歌運動の影響で、丸ごと歌詞を替歌にした例もある。

また、京都系では、《歌恋慕》の〽寝よげに聴くは様の尺八、一節切にも情けあれかし」と２度繰り返す所を、最初の方の二句目だけを〽人の義理にも情けあれかし」と穿った歌詞に聞き違えているのはなかなかの才覚である。

その上、京都系では、柳川検校以来の古態の極細棹に八ッ乳を張った鳩胸のある柳川三味線に鉛を入れない「台広駒」を掛けて、薄くて小さな撥で演奏する「柳川三味線」を脈々と伝承している。勘所を押さえる際も、絶対に探らないで、きちっとポジションを移動するが、九州系では、発音時の音色に綾を付ける為に、独特の坪移動をしている。また、九州系では三弦同士の本手・替手の演奏または、三弦と箏の１対１の演奏を好むが、京・大坂の上方系では、三弦２と箏１の組み合わせを好む、等といった、興味深い相違が幾つもある。

（５）萩岡松韻リサイタルの概要

地歌箏曲のうち、江戸の山田検校を流祖とする山田流箏曲について、その伝承を文化財として検証し、研究成果を発表し、楽曲の魅力を発信する目的により、萩岡松韻は、計 6 回のリサイタルを開催した。その概要は、以下の通りである。①第八回 萩岡松韻の世界 in 東京（平成 29 年 6 月７日）、②第九回 萩岡松韻の世界 in 福島(平成 29 年７月１日)、③第十回 萩岡松韻の世界 in 札幌（平成 29 年８月９日)、④第十一回 萩岡松韻の世界 in 仙台（平成 29 年 10 月 23 日)、⑤第十二回 萩岡松韻の世界 in 東京(平成 29 年 11 月 19 日)、⑥第十三回 萩岡松韻の世界～古曲を聴くⅠ～（平成 30 年 3 月 31 日)。これらのリサイタルでは、山田検校の作品《明烏》《春の宮》《栄ゆる宮》《花暦》《曲水》《ほととぎす》《熊野》《夏やせ》《めぐり逢せ》《櫻狩》《那須野》《布袋》《八重垣》《夏》《千箱の玉章》《紀の路の奥　四季の段》《長恨歌曲》《山櫻》《あづまの花》、作曲者不明の《喜撰》《小野の山》、４代萩岡松韻の作品《花の寺》《信夫の里》《雪の松島》を取り上げた。

山田流箏曲家が伝えるレパートリーは、『山田流箏歌八葉集』（大正５、箏曲八葉会）以来、「組歌」「初学曲並裏歌曲」「中歌曲」「中手事曲」「奥歌曲」「奥手事並に京歌曲」「浄瑠璃曲」「古曲」の８種に分類されている。加えて、『山田流箏歌八葉集』に「続編（新曲）」と記され、その後も現代にいたるまで増え続けている多様な新作もレパートリーとする。山田流箏曲では、流祖の山田検校の作品を基本に置いているが、源照寺（葛飾区高砂。関東大震災により山谷新鳥越より移転）に残る大田錦城が執筆した山田検校の墓碑銘によれば、山田検校には 100 を越える作品があったという。しかし、『屋万田能穂並』（寛政 12)、『吾孺箏譜』（文化 9。文政７に再版)、『山田検校楽譜集（仮称)』（文化９）などの歌本と譜本によって知られる作品は 36 曲に過ぎない。前掲『山田流箏歌八葉集』における山田検校の作品 36 曲の分類と曲数は、「組歌」（１曲)、「初学曲」（４曲)、「中歌曲」(15 曲)、「奥歌曲」（４曲)、「古曲」(12 曲）である。

本研究は古曲と稀曲を主な対象とするが、『山田流箏歌八葉集』では、「古曲」を「現今概ね行はれざるものなれど其時代々々の思想又歌曲の推移考察の資料として捨てがたきもの」と定義し、上記の通り、山田検校の作品 12 曲を「古曲」に分類した。そのうち《かさのうち》《竹いかだ》《葉がくれ》の 3 曲は、現在、歌詞のみが伝わり、音楽の伝承は絶えてしまった。また、《夏》《めぐり逢せ》の 2 曲は、音源もなく、演奏機会が途絶えている稀曲である。萩岡松韻のリサイタルでは、「古曲」に分類されている 12 曲のうち、《明烏》《夏やせ》《夏》《曲水》《めぐり逢せ》《布袋》を取り上げた。そのうち《夏》《めぐり逢せ》は、稀曲の復活演奏であり、2 世萩岡松韻（1893－1966）が残した五線譜の検

証に基づく研究成果である。
　現在は、「古曲」に分類されていない楽曲のなかにも、演奏頻度の少ない稀曲がある。また、山田流箏曲の一部の楽曲には、音楽取調掛が主導した「俗曲改良」による明治時代の替え歌があり、その替え歌も現在は稀曲となっている。萩岡松韻のリサイタルでは、替え歌の稀曲として、《春の宮》の替え歌《栄ゆる宮》、《喜撰》の替え歌《小野の山》を取り上げた。替え歌を紹介する『箏曲集二編』（成立年不明。明治初期に音楽取調掛作成か。東京藝術大学所蔵）、東京音楽学校編『箏曲集』（明治 21）、同編『箏曲集第二編』（大正３）の検証を行うとともに、替え歌においては歌詞のみでなく旋律に対する編曲もあることを実証した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔図書〕（計１件）
①<u>久保田敏子・野川美穂子</u>
『地歌箏曲事典』東洋書院、平成 30 年出版予定

〔その他〕
①レクチャーコンサートにおける講演
<u>久保田敏子・野川美穂子・長谷川慎</u>
「古態の楽器による地歌の会」
「津山検校慶之一の業績とその作品」久保田敏子
「演奏楽曲解説」野川美穂子
「古態の楽器および地歌三味線の変遷について」長谷川慎
平成 29 年 3 月６日　大阪・玉水会館

②演奏会
<u>萩岡松韻・野川美穂子</u>
「山田検校没後二百年記念演奏会」
紀尾井ホール、平成 29 年 4 月 10 日。レクチャー「山田検校の生涯と業績」：野川美穂子、対談：萩岡松韻、野川美穂子、演奏：山勢松韻、鳥居名美野、萩岡松韻ほか、プログラム執筆：野川美穂子

③演奏会
<u>萩岡松韻・久保田敏子・野川美穂子・長谷川慎</u>
『山田検校の魅力を探る～萩岡松韻の世界 2017』平成 29 年 6 月。
演奏：萩岡松韻、プログラム執筆：久保田敏子、野川美穂子、長谷川慎

④演奏会
<u>萩岡松韻</u>
「萩岡松韻の世界 in 福島－9－」
平成 29 年 7 月 1 日、福島県文化センター（小ホール）
演目：信夫の里／曲水／ほととぎす／熊野

⑤ＣＤ作成と解説
<u>久保田敏子</u>
『打ち合わせ作品集』
平成 29 年 7 月、KOGS－3001～2
（演奏：菊王楽正社中／企画・構成・解説：久保田敏子）

⑥レクチャーコンサート
<u>久保田敏子</u>
「都の韻」平成 29 年 9 月 16 日／2018 年 3 月 25 日　京都・法然院本堂
講演「京都の稀曲と京の芸風を守る」久保田敏子

⑦演奏会
<u>萩岡松韻</u>
「萩岡松韻の世界 in 東京－12－」
平成 29 年 11 月 19 日、紀尾井小ホール
演目：夏／千箱の玉章／紀の路の奥 四季の段／長恨歌曲

６．研究組織
(1)研究代表者
萩岡松韻（HAGIOKA SHOUIN）
東京藝術大学・音楽学部・教授
研究者番号：30376925
(2)研究分担者
久保田敏子(KUBOTA SATOKO)
京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・名誉教授
研究者番号：10090200

野川 美穂子(NOGAWA MIHOKO)
東京藝術大学・音楽学部・講師
研究者番号：50218294

長谷川 慎(HASEGAWA MAKOTO)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：00466971